



海外神社跡地から見た景観の持続と変容

# 台湾の神社跡地調査から見た 共同研究の今後の展望

津田 良樹

(非文字資料研究センター 研究員)

新たに始まった共同研究『海外神社跡地から見た景観の持続と変容』の初めての共同調査を2011年9月18日から9月24日にかけて台湾において実施した。調査は初日の18日に台湾に入国するや、一気に台湾の南端に近い高雄まで下り、そこから北上しつつ神社跡地を巡ることにした。台湾をフィールドとし台湾の海外神社に明るい金子展也氏を案内役に翌19日から24日にかけて、神社跡地調査を行った。私にとっては初めての台湾でもあり、行くところ行くところが新鮮で興味深い体験に満ちた旅となった。行程を記せば以下のようなものである<sup>1)</sup>。

19日：高雄神社（高雄市）・阿緞神社（屏東市）・佳冬神社（屏東県佳冬郷）・霊聖堂（屏東県東港鎮）・橋子頭社（高雄県橋頭郷）・開山神社（台南市）・第1次台南神社（台南市）・第2次台南神社（台南忠烈祠）。

20日：嘉義神社（嘉義市）・林内神社（雲林県斗六市）・田中神社（彰化県田中鎮）・員林神社（彰化県員林鎮）。

21日：第1次台中神社（台中市）・第2次台中神社（台中忠烈祠）・能高神社（南投県埔里鎮）・醒靈寺・日月潭玉島社（南投県魚池郷）。

22日：新竹神社（新竹市）・霊穩寺（新竹市）・通霄神社（苗栗県通霄鎮）・桃園神社（桃園市）。

23日：台湾神社：台湾神宮（台北市）・台湾護国神社（台北市）・金瓜石社（新北市）。

24日：建巧神社（台北市）。

その間、神社跡地を巡り、さらに神社の遺物が移転残存する場所<sup>ii)</sup>にも足をのぼしたため、ハードなスケジュールであった。

台湾における神社跡地の第一印象は、これまでに実施した韓国や旧満洲国の神社跡地調査の知見からすれば、台湾の多くの神社跡地には残される遺構が多く、跡地以外に移され残る石灯笼・狛犬・神馬など遺物も多いことである。社殿や付属建物がそのまま残る場合もあるほか、

建物はなくなっているが、かつての様相をよく伝えている場合もある。それどころか、近年になって復原工事が行われ、かつての神社時代の様相に戻した上で、忠烈祠に再利用されている場合もある。それら台湾における神社跡地の状況を踏まえ、今回の調査で気づいた点、今後の課題などについて、以下に記しておきたい。

## ①佳冬神社

佳冬神社は、高雄よりさらに南の高雄州屏東県佳冬郷佳和路（旧所在地：東港郡佳冬庄佳冬）に位置する。昭和11（1936）年に鎮座し、能久親王、開拓三神（大国魂命・大己貴命・少彦名命）・天照皇大神を祭神とする無格社であった。境内の規模はさほど大きくない。跡地の現状は一直線に配された奥行き100mほどの参道の入り口付近に一ノ鳥居や神橋が残り、参道両側には石灯笼の基壇らしき石が残る。奥に進むと中ほどに二ノ鳥居の右側の柱が残り、さらに進むと三ノ鳥居の亀腹のみが残っている。突き当たりには本殿が置かれていた間口4mほど、奥行き7mほどの基壇が残る。基壇には正面に8段の石段が取りつき、階段上には四ノ鳥居が立つ。基壇上の奥まった位置に本殿の礎石も残っており、間口が1.5mほどの流造の本殿が建っていたのではないかと思われる。以上のように旧境内地からかつての様相を伺い



写真1 佳冬神社の現状。一ノ鳥居の奥に神橋の欄干が見える。はるか突き当たりが本殿跡の基壇である。



写真2 霊聖堂。遠くから見ると仮設の屋台のようにも見える。入口の上部には「天皇忠心志士魂帰他郷凝為正気」と書かれている。



写真3 霊聖堂内部。手入れが行き届き線香の煙もただよっている。祭壇のガラスケースの中には将軍・兵士・娘などの像が祀られている。

知ることができる。参道脇の小屋の中や、傍らには奉納者名や年紀が刻まれた石灯籠の棹部分が無造作に置かれている。また、当社の狛犬は近所の国立佳冬高級農業職業学校に移されて、その出入口両脇を飾っている。跡地の地勢や残された遺物などを総合すればかつての様相を復原することが十分可能な例であるといえよう。

## ② 霊聖堂

屏東県東港鎮船頭里の霊聖堂は神社ではないが、興味深い宗教施設として取り上げたい。地元の台湾人自らが、戦死した日本人の将兵を祀るものである。この霊聖堂の場合米軍によって撃沈された艦船の日本軍将軍および兵士の霊を祀っている。さらに将軍の娘であり兵士のいいなづけでもあった日本人女性が、父やいいなづけの死を悼み非業の死を遂げたということで、この女性の霊もまた祀られている。霊聖堂は掃除も行き届き、線香なども絶やさず供えられており、今もなお信仰が生きつづけている。日本軍人の亡霊を鎮めるために始まったといわれるが、台湾人が単に亡霊を鎮めるためだけに、日本軍人



写真4 第二次嘉義神社。正面基壇の上に1994年まで社殿が残っていたが焼失。現在は跡地に射日塔が建っている。



写真5 第一次嘉義神社社殿跡。第二次の軸線から90°振れている。手前の礎石が点在する場所に拝殿。奥の基壇上に本殿が建っていた。

の霊を祀っているとも考えがたい。今もなお信仰が生きつづく台湾人の精神的・思想的背景を深く掘り下げてみる必要があるのではないと思われる。なお、この種の日本人の霊を祀っている堂が霊聖堂ばかりでなく他にも数か所あるという<sup>iii</sup>。

## ③ 嘉義神社

嘉義神社は嘉義の市街地の東のはずれ嘉義公園内（嘉義市東区公園街）に位置する。大正4（1915）年の鎮座で、大正6年に県社に昇格し、さらに昭和19（1944）年に国幣小社に列格した。現況は、元の神社入口付近には社号碑の表面一皮分を削り取り「台湾県嘉義市忠烈祠」と刻みなおした石柱が残り、幅広の一ノ石段を登ると左右に狛犬が安置されたままになっている。東西に延びる参道を進むと二ノ石段に至り、石段を登ると戦後に造られたであろう中国風の石造の門が立つ<sup>iv</sup>。両脇に石灯籠が並ぶ一直線に延びる参道沿いの右側には木造の社務所・齋館、校倉状に造られたコンクリート造の躯体に木造屋根を掛けた祭器庫が神社時代のままだに残る。一方、





写真6 林内神社下の石段と二ノ鳥居。右手に見える建物が私立淵明国民中学。鳥居の笠木には戦後の台湾で常とう手段である中国風の屋根が付加されている。

左側には参集所、手水舎も残っている。さらに進むと左側に参道に対し直角に折れ曲がった第一次嘉義神社の参道があり、第一次嘉義神社の拝殿の礎石、その奥には本殿の基壇が残されている。第一次の参道を曲がらずにさらに進むと三ノ石段があり、その奥には1994年まで第二次の社殿が残っていたが、いまは射日塔という展望台に代わっている<sup>v</sup>。

嘉義神社は中心となる本殿・拝殿はないが、神社時代の建物が多数残っており、社号碑・狛犬・多数の石灯籠などの遺物も多い。そればかりではなく、第一次、第二次の嘉義神社遺跡が軸線を直交させて重なっており、第一次、第二次において、嘉義神社の様相がどのように持続・変容しているのかを確認する上でも貴重な遺構だといえよう。

#### ④ 林内神社

林内神社は林内駅の南方600mほどの山の裾野（雲林県斗六市林内郷）に位置する。昭和15（1940）年の鎮座で、能久親王・開拓三神・豊受大神を祭神とする無格社である。駅から中生路を南西に進み鈍角に左折するとコンクリート製の大きな一ノ鳥居が残っている。さらに進むと下の石段に突き当たり、石段を登り切れば二ノ鳥居があり、左右に石灯籠も残る中段である。さらに

上の石段を登ると右前方にかつての拝殿・本殿跡地に戦後に建てられた中国風の廟の建物が建つ上段である。上段は小高く林内郷を見渡すことができる。以上のように鳥居・石段・石灯籠などの林内神社当時の遺物が残るほか、かつての地勢などがよくわかる。無格社とはいえ、なかなか規模の大きな神社であったようだ。

この神社の調査で特筆できる点は新たな資料の発見であろう。中段の東側に位置する林中国民小学の渡り廊下には林内神社時代の古写真が展示されている。古写真の出典を尋ねたことが切っ掛けで、林中国民小学の向かいにある私立淵明国民中学から古写真のデータを提供されることになった。さらに紹介いただいた林内国民小学では卒業アルバムなどから林内神社の古写真を発見することができた。このように、地元において丁寧な調査を行えばまだまだ新たな資料を発掘することが充分可能であることを示す事例である。

#### ⑤ 桃園神社

桃園神社は神社時代の様相を極めてよく伝えていることで知られている。現在の状態は単に残ったというだけでなく、積極的に神社時代の様相に復原した結果である。この桃園神社は昭和13（1938）年の創立で、戦後1946年に新竹県忠烈祠とされ、行政区分が桃園県になるや1950年に桃園県忠烈祠となっている。忠烈祠は本来、辛亥革命・抗日戦争・中共との戦いで戦死した人々の霊を祀るところで、日本の靖国神社に相当する場といつてよい。そのような忠烈祠に日本時代の神社をそのまま使用し<sup>vi</sup>、かつ修理復原を加えてまで保存をはかる、台湾人の精神構造についても検討する価値が充分にあると思われる。



写真7 桃園神社。神社時代の遺構をそのまま使い忠烈祠としている。



写真8 霊穩寺。新竹神社の石灯籠を移転させ本堂前をかざっている。



写真9 台湾神宮新社殿跡地。日本特有の格式を示す筋堀が今も残っている。

## ⑥ 霊穩寺

霊穩寺は、新竹神社<sup>vii</sup>が戦後廃止された際に新竹神社から石灯籠や手水鉢など多数の石造物を移し、境内の各所に配置した寺である。運ばれた石灯籠は30基以上におよび、神社時代の様相のままに使用されている例が多い。石造物に刻まれた刻銘も他の神社などではモルタルを上塗りしたり、文字面を削り取るなどして全面的に消されるほか、特に昭和などの年号は必ずといっていいほどに消されている。ところが、当寺においては「奉獻新竹州農会」（下線の字は消されている）「創建二十五年記念、昭和八年十二月十六日」のごとく行政区分が変更した箇所のみ消され、その他はそのまま残されるような例が多い。現在とは異なり、戦後間もなくの重機もない時期にこれだけの石造物を移転させ、それを寺の各所に配置するというエネルギーの源はなになのであろうか。また、刻銘をあえて消さない理由もあるのではあろうか。このような事象の背景を探ってみる必要があると思われる。

## ⑦ 台湾神社・台湾神宮

台湾神社は、能久親王および開拓三神を祭神とする台湾の総鎮守として、明治33（1900）年に創建された官幣大社である。その後、社殿老朽化を理由に新社殿造営が計画され、昭和19（1944）年6月17日に天照大神を増祀し、台湾神宮に改称した。ところが新社殿への遷座祭の数日前の昭和19年10月23日、日本旅客機の事故により炎上したとされる。新社殿跡地も旧社殿地の東側の山懐に造営されたとされるが、炎上したこともあり、その上情報統制されたためであろうか実態はよくわ

かっていない。戦後には、台湾神社跡地は圓山大飯店となり、社殿跡地などにホテルの大規模な建物が覆いかぶさり神社時代の様相はほとんどわからなくなっている。一方、新社殿跡地も圓山大飯店の分館などの建物が建てられ不明だとされてきた。

ところが、今回の調査で新社殿跡地においては、日本独特の筋堀や礎石の一部、さらには地下遺構を確認することができた。それら遺構や戦後間もない時期の米軍による航空写真などを総合して検討すれば、新社殿について、位置の確定・全容の解明も不可能ではないと思われる。

以上7件は大きく見れば、2つの観点に集約できよう。①③④⑦は神社跡地の景観の持続と変容についての検討であり、②⑤⑥は地元台湾人の神社も含めた宗教・精神・思想の背景をさぐることであろう。共同研究の残る期間のなかで、以上のような点を踏まえテーマを絞り込みながら解明できればと考えている。

i 神社については、本来旧神社とすべきであるが、煩雑をさけるため、以下では旧を省略した。  
ii 高雄忠烈祠には高雄神社の狛犬、宝覺寺には台中神社の石灯籠、醒靈寺には能高神社狛犬・石灯籠というように、旧神社からの遺物が移転残存する例が多い。  
iii 同行した研究協力者の金子展也氏が確認した範囲でも、苗栗県獅頭山勸化堂、嘉義県東石郷副瀨村富安宮、台南市安平區鎮安堂飛虎將軍廟があるという。  
iv 嘉義神社は、戦後忠烈祠に転用されている。その際にこの門は造られたのではないと思われる。  
v 嘉義神社の社殿は1994年の火災で焼失するまで忠烈祠として使用されていた。  
vi 台湾護国神社はじめ、前記の嘉義神社など忠烈祠に転用される例は桃園神社以外にも多い。  
vii 新竹神社跡地は現在不法入国者の新竹収容所として使われている。社務所・齋館など神社時代の建物が今も残っている。収容所となっているため通常見学は難しいが、幸いにも今回特別な計らいで、収容施設以外の部分の見学が許可された。